

北海道東部の開拓開教とその現状

久 住 謙 是

(現代宗教研究所調査主任)

はじめに

現代宗教研究所では、一昨年から、調査部門の中で、とくに寺院の実態調査を進めてきた。戦後の社会経済の変動によって、地域における種々の問題点が顕在してきた。いわゆる、農村の過疎・都市の過密問題である。

今回、調査対象とした北海道東部(日蓮宗北海道東部管区＝道東)は、日本の中心より最も離れた地域であり、かつ広域である。

環境的、社会的諸条件のハンデは、道東にかぎらず全道的な問題ではあるが、過疎化現象は、その象徴的な事象である。

本年は、道東を二回にわたって調査を実施したが、あまりに広い管区のため全域を廻ることはできなかった。しかし、帯広市・紋別市・網走市を結ぶ、延八百キロメートルを走り、十八カ寺を尋ねることができた。残念ながら、釧路市・根室市方面は、今回調査できなかった。以下、その一端を報告するものである。

個々の寺院状況

A 寺

清水町唯一の日蓮宗寺院である。住職は、現在、町宮特別養護老人ホームに入っており、寺は奥さんが法務と護持に勤めている。

檀家は百戸ほどあったが、現在は減少して六十戸位である。住職に子息はあるが、僧籍はなく、東京へ就職した。後継者は無く、法縁の本山から来てくれることに期待をつないでいる。

創設者は、現住職である。立正大学を卒業すると、北海道開教を志し、旭川市妙法寺を経て来町した。清水町は宗門教師が入ったことのない未開教地で、先行した他宗の檀信徒を改宗させ、日蓮宗に帰依させることであつた。

宗門信徒の居ない、ふれあいのない町、ゼロからの布教は困難なことであつた。生活苦から従軍僧を志願して満州に渡ったり、こどもの教育は自分でできず、他所へあずけなければできなかった。

「太鼓一丁で寺を建てた」という言葉で言われるように、太鼓一丁持つて来町して以来、太鼓を打ち鳴らし続けた布教活動に一貫した。日常の活動は、朝五時起床、改良服に頭陀袋を首にかけ、八時から、夕方六、七時に帰るまで、町中の各家ごと、玄関前に立つて、宗旨・信不信を問わず読経・唱題・回向を行った。他宗の坊主が勝手に拝むことに、嫌がらせや怒りをあらわにすることもあつたが、「忍辱の鎧を着て」根気強く、毎日玄関に立ち続けた結果、太鼓を打ち、町を回る法華の坊さんが定着した。挨拶を交わすようになり、やがて人生相談、よろず相談に応ずるようになった。日蓮宗の信仰を傾聴するようになった。それから入信する者があらわれるようになった。ときには、街頭布教を行い法を説く信念だけでは教化はできない。くる日もくる日も町へ出掛け、とくに寒修行のときは、徹底して行

った。

教会設立、寺号公称と、未開教地に伝道して拠点をつくった。

しかし、開山である現住職は、病氣と老齢のため、現在、入院療養している。再起は不可能である。親の開教の苦勞・生活苦を知っているこどもは、後継を願わない。未開教地に建立された新寺が、後継者無く、開創者一代で終るという危機が無いわけではない。

調査班が、病院に住職を見舞い、言葉をかけたとき、目を閉じ、大粒の涙を流し、声をあげて泣いた。開教の労苦を知り、宗門が慰門に訪れたと感じ取ったのである。開教の使命観に燃え、太鼓一丁、渡道して新寺建立した僧が、生活保護を受けて特別養護老人ホームに臥床している姿を見たのである。

B 寺

紋別郡生田原町にあるB寺は、住職不在が長く続いている。昭和三十七年、住職遷化以来、常住者なく代務寺となっている。

大正八年、三人の篤信者が相はかつて布教所を設立、以来、七人の担任教師が、教化に当たり、終戦後、昭和二十一年に寺号公称してB寺となった。当時、三十四戸の信徒といわれたが、現在は不詳である。

生田原市街を見下ろす、石北本線に沿った丘の上にあり、公園が隣接している。間口四間、奥行五間の御堂があり、庫裡は無い。入口はくぎづけされ、窓越しに中を見ると、長い間、人が入った形跡はなく、寺として機能していない無住寺であった。

住職在住時も、僧侶としての活動より、むしろ、生活のための肉体労働に従事せざるをえない、開教戦線のきびしい環境下であったと考えられる。

創設から、七人の教師が担任として替わり、二十数年以前から無住寺と化してしまっている状況から、結果的に布教拠点として教化の実はあがらず、寺院の建物が存在するだけで、内実は形骸化してしまっていると推察される。

建物の周辺は雑草が繁り、一見して寺ではなく、住む人の無い放置されたままの住宅といった感じで、地域の過疎化、住職不在の寺院の実態が、現実としてB寺に認められた。

C 寺

オホーツク海沿岸、興部町から、名寄本線に沿って内陸部へ西進したところ、道東のはずれ、山を越えれば道北である、上興部村にC寺がある。

昭和三十年代には、上興部村・下興部村合わせて百戸を数えたが、現在は二十六戸に激減した。網走管区でも一番の過疎化の地域といわれている。木工所があり、盛んであった林業も不振、農業もだめ、かろうじて酪農にきり替えた酪農家があるのみで、地元の産業はない。かつて小学校の三教室が満杯であった生徒数は、昨年の新入生ゼロ、今年は三名であった。札幌・旭川・室蘭・紋別・名寄の各地へ移住してゆき、主に肉体労働に就労している。かつて四、五十軒あった集落が壊滅してしまっている。二十六戸の在宅者は、酪農一、郵便局員一のほか、老人と未亡人世帯のみである。

寺は、月経回り、月忌回向の布施収入にたよって寺族生活を支えてきたが、檀家の減少で、住職常住することができなくなった。

しかし、檀家は、住職夫婦の生活費を持つから寺に留まってほしいと言っている。住職は、檀家の生活費補助を断り、アルバイト坊さんになるとして、遠方で不便でも、法要出座に雇ってくれるよう、有力なお寺へ依頼している。また、月忌回向も、地元だけではだめなので、遠いところも、泊りがけで出掛けて行って、つながりをつけ、護持会

費などは、納めてもらうようにたのみこんでいる。

月忌回向のほか、年中行事として、盆・彼岸・守護神祭・講などを行い、とくに、C寺では、毎年七月十九日に行う行者の滝・白法竜神大祭が、町と営林署と協力して実施、四百余名の参拝者で賑い、町の過疎対策、観光施策と相俟って成功している。

現在、住職は老齢に加えて健康ではない。住職不在のときは、得度している夫人が、月忌回向や寺での法要を勤めている。こどもが無く、後継者も決まっていない。将来のことは、有力なお寺を手伝いながら、住職をつとめて下さる方があつたらお願いしたい。そのときは、私たち夫婦は、その住職に迷惑かけぬよう老人ホームに入りたいと思っている、といっていた。

D寺

紋別郡滝の上町にあるD寺は、上興部C寺より、三十キロメートル南下した盆地の中にある。

大正六年、篤信者の寄進で堂宇を建立、招かれて日蓮宗教師が担任して創立し、終戦後、寺号公称した。近年、遠忌記念に本堂を再建した昭和三十年前後、人口は一万四七〇〇人で、農地は畑作に適して豊かに実り、林業は原材料が豊富で、製材業が花形産業であった。

昭和二十九年、台風で倒れた原木を材料に、二十三の製材所を数えた。D寺の檀家も百戸を越えた。しかし、現在は、千戸あった農家が二五〇戸、四分の一に減少した。三千町歩の畑は三分の一に減り、その他は酪農地化した。昔ながら、狭い耕地での畑作は、経営が行き詰り、広い面積を粗放的多角的に営む農業に変わり、季節労務・出稼ぎ仕事から、やがて農地を捨て、都市に移住するものが続出した。林業も、山から出る原木供給も底をつき、外国材輸入に依存する状態となって、辺域の製材業では成り立たず、製材業は七軒に縮小された。わずかに、酪農が現状維持して

いる以外、地元での就職の機会はなく、東京・札幌・旭川・室蘭などへ職を求め、中学卒は、静岡県浜松市へ集団就職が行われるなどした。

林業の衰退・農業構造の変化、少人数の大規模経営によつて、余剰人の離農者、労働を吸収する地場産業の無いことなどが、人口流出を促し、一層過疎化を進めている。現在、人口は五三〇〇人で、かつての三分の一である。

したがって、D寺における檀家も五十戸に半減し、その内、十戸が生活保護世帯である。こどもがいない。いても遠くへ働きに出ているため公的な扶助を必要とするものである。

酪農家で二十代・三十代の後継者とともに就労しているほか、上興部村C寺檀家と同様、働いている人の高齢化がすすみ、老人世帯や未亡人の檀家が多い、年寄が亡くなっていったら、将来、寺の維持はどうするという心配を、檀家一同が危惧していることである。

昨年、減ってしまった檀家が力を合わせ、一八〇〇万円をかけて本堂を建築した。さらに、納骨堂と物置も完成させた。しかし、完成間もなく、四十年間住職を勤めた老僧は、その高齢と病気の理由で、札幌の子息の俗宅に引き取られ寺を去った。住職には二人の子を出家させ僧職にあつて活動しておられるが、滝の上に戻つて師父の寺を継ぐ予定はない。檀家はどなたか住職に来てくれることを望しながら、貧乏に負けない人、マッサージ・ハリ・灸などの資格を持って兼職し、寺の収入をたよらないでやってゆけることを望んでいるのだが……。寺族生活が保証されない状況で、住職就任をきびしくしているようである。

檀家は、役員に若い人も入れ、年寄の知恵と若い人の実行力と積極性が合致して、過疎地の中で、寺の再興をはかった信心にもとづく協調性を誇りとし、住職不在ながら寺院護持に活力が溢れていた。

E 寺

E寺は斜里郡小清水町にある。大正十年、小清水布教所として開かれる。当地へ開拓者移住した法華信者の発願である。昭和十五年、結社となり、昭和二十二年、寺号公称した。網走市大盛寺歴代上人がE寺発展に尽力した。

第三世先代住職は、昭和四十五年、本堂・庫裡を新築、同五十四年、増改築と納骨堂を建築して、今日のE寺を完成させた。

しかし、不幸なことに、急に遷化されてしまわれた。残された寺族は、未亡人と二人の未成年者である長女と長男であつた。

後住職は、遷化された先代住職の長男が、学業を終え、住職資格を得るまで面倒を見る形で、先代住職の弟子が、内地で布教につきながら、E寺に入らず名儀上の住職になつてもらい、今迄通り、先代住職の寺族親子で、法務や護持を行うことになつた。

長男は学校から帰ると、沙弥ながら、月経廻りを勤め、未亡人は檀信徒の応対、長女は車を運転して、母と弟を助力した。父である先代住職が、檀信徒を教化、督励して寺觀を整え、過疎地域ながら、住職の努力によつて今日の成果を納めてきた。そのE寺を護り、檀信徒を指導してゆくことは、並み大抵のことではなかつた。明年、長男は身延山へ修行にのぼることが、母・姉の願いであり、檀信徒の期待するところであつた。

しかし、一山の護持は、母と子ども二人には、負担が重すぎたのであろうか、未亡人は強度の眼病を患い、このままの状態では回復はおぼつかない。環境を変えること、心身のやすらぎと治療に専念することが、今、もっとも大切であり、手遅れにならないように、という医者診断であつた。

われわれ調査班は、二階にある広い本堂に参拝した後、一階の庫裡で挨拶したが、われわれ一人一人の顔さえも、さだかに認められないほど、視力を失つていて、母子三人、E寺を出ることを決断していた。傍に身延山修行を目前

にして、寺を去る童顔の長男の澄んだ目が印象的だった。

帰途の車中、先代住職の遺族は、これからどこへ行こうとしているのか、あの長男は、出家する機会を、なくしてしまうのであろうか、という思いが脳裡を去らなかつた。

開教地の厳しさ、そして、過疎現象、その中で布教戦線に生命を賭け、人生半ばで遷化した住職、その後の寺族の生き方に、同苦同悲の宗門人として、そして宗門に何ができるのか、思わされたことであつた。

F 結社

帯広市郊外にある音更町に、F結会はある。昭和三十九年、帯広市法華寺住職について出家、結社を創立した。創立者で、教導の教師は、すでに遷化され、その夫人が教化に当っている。後継予定者は現在のところいない。

教師不在ながら、夫人の布教活動は活発で、毎月の講には三十人位の出席があり、お会式には百人位の集りがある。日常の教化活動が、独特の方法を用いて信者がたえない。結社は、二階に御宝前と治療室を持ち、治療のための宿泊室も用意されている。

夫人は、身と心を同時に治療することをめざして、信仰による心の健康・浄化とともに、身体の不健康・病気も同時に治療する施設を持っている。いわゆる温灸療法である。温灸に用いる味噌は、独自に作り、治療に当っている。身心が一如して健康となること、何より信仰の有難さである。治療を受ける人は、御宝前にお参りをしてから行い、治療中の夫人の信仰指導も大きな教化力となっている。

夫妻は、苫前郡羽幌町の出身で、浄土真宗から法華に改宗した。音更町に落ちつくまで、十五カ所、所を変えつつ、行くさきざきで治療と信仰指導を続け、法華経でなければ救われないと説き、多くの日蓮宗信者をつくってきたという。

北海道は、新興宗教が盛んで、えたいが知れぬ擬似宗教が浸透していることを憂え、正しい法華信仰が弘められなければならない、と信仰をもつて、故遷化上人の意志を継ぎ、強信で頑張っている。

ユニークな身心健康をめざす結社も、後継者の見通しがついていない現状である。

道東寺院をとりまく環境

道東は、北海道東西南北に分けた東部分で、南は太平洋に面し、北はオホーツク海、東は日本の東端、国後島・色丹島の北方領土を望む、三方海に囲まれた北海道で最も広い行政区域を有し、帯広市を核とする十勝支庁、釧路市を核とする釧路支庁、根室市を核とする根室支庁、網走市、紋別市、北見市を核とする網走支庁の四支庁に分けられている。

各市庁の核となる都市は、人口の増減には大幅な変化がなく、微増は釧路・網走・北見・帯広の各市、やや減少は根室・紋別の各市である。各市庁ごとの人口の合計は、僅かながら増加している。その中で、網走支庁の紋別地域が減少しているのが目立つ。

しかし、道東六十一市町村を全体的に見ると、昭和四十五年～五十年に八五%、五十～五十五年に七〇%が、人口減少しており、過疎指定地域となっている。都市より町村の人口減少が著しく、道東の都市は周辺の町村から人口吸収によって維持している。町村から都市への人口移動は、さらに札幌・旭川などの道内主要都市、東京などの大都市へと移住する傾向がみられ、かつて北海道開拓によって流入した人口が、社会の変動によって逆流出現象となっている。開拓進出期もそうであったように、現在も人口移動の主体は、零細農業従事者であること、再び移住を強いられ、追い出されている感が強い。農村崩壊といえは言い過ぎであろうか。

昭和五十五年度、日蓮宗勢調査によると、北海道教区では、檀家の減った理由の九二%（全国平均三八%）、信徒が減った理由の九〇%（全国平均四四%）が、人口の過疎をあげている。過疎による人口減が檀家の減少に連動しているのが、北海道の特色である。ここに、寺院問題の根源がある。

現在、道東の日蓮宗寺院・教会・結社は、日蓮宗名簿（昭和五十八年度）によれば、四十二カ寺、一教会、四結社の計四十七を数える。

因みに、道東の仏教各派寺院総数は、四九一カ寺で、真宗大谷派一一二カ寺、浄土真宗本願寺派一〇一カ寺、曹洞宗九十九カ寺、次に日蓮宗、高野山真言宗、浄土宗の順位である。真宗系二派と曹洞宗で、道東寺院の六三%を占め、いかに教勢を伸ばしているかが判る。日蓮宗は一割弱の状態である。

寺院の所在別を見ると、市部に二五%、郡部七五%である。とくに上位三宗派は、平均以上に郡部の比率が高く、各派の教勢分布は、郡部中心に伸展した農村開教のあとが認められる。日蓮宗は、郡部六七%で、むしろ、市部に寺院が所在している傾向である。

こうしてみると、過疎化に伴う寺院の現状は、上記三宗派は、さらに問題を深くしていると推察されるのである。

日蓮宗道東開教の歴史をたどってみると、道南・道央地区の後発地域であり、明治維新後、国家政策としての開拓事業が始められた、いわゆる近代に入ってから、開拓団とともに伝道が進められた。布教所・説教所が設立され、宗門の拠点づくりが形成されたのは、道東宗門寺院史から管見すれば、開拓移民団の中に、郷里から持ち込んだ法華信仰の人びとがすでに存在し、みづから講や布教所を設立、または宗門教師を招いた契機に設立されている。開拓地伝道を目ざした教師の努力、さらに、身延山などの本山、道南の寺院などの支援や、やがて力を蓄えた地元有力寺院などの支援によって、開教が進められてきた。そのうち、陸別町小利別の前啓寺は、日蓮宗移民をすすめた宗門創立の

特異な開教寺院といえる。

一方、全く宗門信徒の存在しない未開教地、いうならば、他宗派を信奉する人びとの中へ入って、法華信仰を宣教鼓吹して、ついには改宗せしめる布教が行われた。さきの宗勢調査における、檀家の増えた理由に、北海道教区は、改宗六五%（全国平均三八%）と、群を抜いて高率を示し、いかに開教が転宗帰依の成果をあげているか、教師の努力が知られるのである。

こうした、伝道活動によって、宗門布教の拠点が作られている。

これを、創立年代別にみると、明治年間に十八カ寺、大正年間に十二カ寺、昭和年間に六カ寺、不明五カ寺である。明治年間に今日の有力寺院が創立されて道東の拠点がすでに形成された。しかし、寺号公称は、明治五年、大正五年、昭和三十一年と、圧倒的に昭和に入って、それも終戦後のことである。

明治十年代の創立は、釧路・厚岸・根室などの太平洋岸、同二十年代は、網走・紋別とオホーツク海沿岸、三十年代は、その両方面にみられ、四十年代は、本別町・美幌町・北見市・音更町といった内陸部に創立が見られる。道東開拓が漁業から農業へ、海岸から内陸へと、開拓進行に符号するように、宗門の伝道拠点づくりが行われた軌跡が創立史から窮い知られるのであって、開拓に従事した人びとの苦難の中で、開教進出寺院（布教所）がどれほどか命の救いになったことであろう。

信者の苦しみと共に、開教師の苦難も、今日のわれわれの想像以上であつたろうと推察される。今日の道東寺院は、創立史によってみると、個々の寺院が、開拓地開教によって形成されたといえるのである。

そして、今日も、過去の開教に匹敵する、困難な状況を迎えているといえよう。次に、その状況を調査にもとづいて報告したい。

道東寺院の現状 ——— まとめ ———

現在、道東の日蓮宗寺院は、四十二カ寺であることは、さきに記した通りである。

過疎地における寺院で、顕著に表われる事象は、①住職不在（無住）と、②後継者が無いという二点である。道東に適用してみると、次のような結果である。

- ①住職が不在、七カ寺（一七％）
 - ②後継者なし、十二カ寺（二九％）
- である。

過疎指定町村が七〇％に及ぶ、全国屈指の地域ではあるが、予想より低い住職不在寺院数であり、後継者無しとする寺院も、全国平均（宗勢調査五十五年度）と同率である。むしろ、この数値は意外であったというべきであろう。全国の比率と相似しているとはいえ、もう一度、現地の状況を知り、個々の寺院を追求した場合、開教伝道に成功し、今日もさらに発展を遂げている寺院に反比例して、過疎なるがゆえに、手だてを失って衰退の時流にまかされている寺院が存在することを、さきに個々の寺院考察で見た通りである。

過疎地域の狭間で、さまざまな形で、寺院問題を惹起せしめている。

①住職不在寺院（無住）、②後継者なし寺院の全体的に共通していることは、市部でなく郡部、町村の立地である（中には、市部に新寺建立寺号公称しながら、寺の機能なく教師も居ないという寺も存在した例外もあるが）。そして、過疎化地域ということである。

B寺・C寺は、過疎の波におそわれた典型であろう。C寺の村落が挙家離村、全く村落の形態を失わしめるほどの

人口流出であり、その中での寺院維持のための戦いである。B寺は、長い間の住職不在により、荒廃にまかされている。別項で考察した小利別の前啓寺の現状も、同様であるといえる。

A寺・D寺・E寺の後継者難も、背景には過疎なるが故の問題と指摘できる。教師および教師の家族は、基本的には生活問題がある。

よく、坊主はお経さえあげていれば、という。それは、人びとが居るという前提である。過疎は説くべき対告衆が居ないという環境である。A寺は、生活の悲惨を知る子息が法灯を継ぐ意志を放棄して在俗の仕事に就き、D寺は子どもを出家させながら、過疎なるがゆえに、戻って継ぐ気配はない。生活できないことを承知しているからである。

寺族生活の困難は、後継者を育成することの難しさにも通ずる。無住寺が増える所以であろう。

A寺住職は、町営特別養護老人ホームに入って、開教伝道に賭けた生涯を終えようとしている。この実状を見て、理屈ぬきに、宗門とはいったい何だったのか、考えさせられたことであつた。伝道宗門に全生命を燃焼させ、死を待つばかりの開教師が、町の生活保護を受けてベツトに臥している姿を見たとき、いのちがけで全てを投げ打って布教にかけることを、すべての教師が潔しすることができであろうか。A寺の開創由来には、「立正大学を卒業、開拓布教を志し来村、教会創立、寺号公称」とある。その人の現実の姿なのである。考えさせられることである。

一方、檀家はどのような状況にあるのであろうか。さきにも記した通り、農業の国策の励行と相俟つて、零細農家は、いきおい、現金収入を求めて、季節労働者として都市へ出稼ぎに行き、女・こどもが家に残り、やがて、都市で就職すると、家族ぐるみ移住、僅かに老人のみ居残るという形がみられ、過疎寺院の檀家減少を招いている。新しい酪農世帯が成功しているが、広い面積を粗放的に利用するため、村の人口は極端に減少定着がすすみ、かつての檀家数の回復は望めない。

林業は、山の資源が底をつき、木材の輸入、需要の延び悩みなどが重なり、かつて製材業で発展した町は、一様に低迷し、人口減少が進んでいる。製材業に依っていた人びとも、他に職を求めて町を去っている状況である。

地元の学校を終えた子どもは、地元で就職機会はなく、都会へ集団就職する例もみられる。過去に本州東海地方の楽器工場や紡織工場などが就職先であった。

D 寺の檀家数の半減は、こうした社会背景が原因である。

日本の昭和三十年代以降の高度経済成長は、二次・三次産業の都市中心であり、一次産業依存の地方農村を疲弊させてきた。地方農村を拠点とした寺院は、同様にその影響を深刻に受けているのである。

こうした、きびしい環境において、道東寺院は、どのように対処しているのであるか。

先述のように、住職が病身で十分な活動が不可能であったり、不在・代務寺は、檀家の減少を招いている。

しかし、過疎地にあり、町の人口減少が認められながら、住職の努力によって檀家を減らさない、むしろ、増加させている寺院もある。月忌回向は、寺院と檀家を結ぶ日常的な必須の教化の場であり、修法布教は、九州・東北とともに、全国で最も高い比率で行われている。回向供養と祈禱の両面から教化方策が積極的に進められている。

宗旨問わず町全戸への盆棚経や寒行、冬の農閑期の講に、近所の宗旨外の人びとへの勧誘、檀家以外への月忌回向や祈禱会など、未信徒の信徒化に、それぞれの創意工夫、布教方策が講ぜられ、下種結縁、檀徒化の努力が、開拓地開教以来の伝統のように旺盛に進められている観がある。

護法運動が、新興宗教攻勢による危機から興ったとすれば、道東は、現在、この全国一の過疎化に加え、三年連続の米不作、二百カイリ漁業問題など、現代の社会問題を、第二の危機として受けとめており、教化のための道東管区の結果を、さらに強めているようだ。護法組織は、地域によっては開店休業も無くはない。道東は、僧俗によって組

織され、信徒の真摯な信仰心と時代の進取性などを反映させ、社会に対応できる護法運動をめざし、年毎に予算を増し、活性化を図っているのは、新たな道東管区の護法運動への展開と受けとめられる。寺院が協力し、僧俗が一体となって、過疎に対処してゆこうとしている。その意味から、宗祖七百遠忌は、各種の事業の推進で檀信徒の結束を図る好機であった。

われわれは、調査に訪問した各寺院で、実状を懇切にご説明戴くことができた。不在寺院では、近隣の寺院住職が、案内と説明を申し出て下さった。連絡が徹底していて、無住寺は檀徒役員一同が迎え出て、時間を忘れるほど熱っぽく現状を伝えてくれた。

佐野順常宗務所長は、役目柄とはいえ、全行程を同乗して、疲労を厭わず案内してくれたことは、有難いことであった。その他、とくに、帯広市法華寺住職内山智洋上人、渚滑町法順寺住職加藤順祥上人、女満別町妙行寺住職岡耐行上人のご案内をいただいた。また、道東管区の実状を釧路市法華寺住職室伏見順上人、白糖町妙雲寺住職望月本要上人、釧路郡妙善寺住職前田順孝上人から伺う機会を得た。現宗研嘱託、網走市大盛寺住職秋永智徳上人は、旅行中のため不在であったが、事前に資料を提供して下さいました。同じく、美幌町本妙寺裡岡元鍊城上人からも間接に資料提供下さった。陸別町妙法寺住職早田寿甫上人には、日宗村旧在住者を捜し、面接の労を取って下さった。山梨県市川大門町宮沢寺住職海沼啓文上人、同妙学寺住職土屋智妙上人は、日宗移民出身地で貴重なご教示をいただいた。その他、日宗移民の家族、陸利町図書館など寺院以外の多くの方々のご協力をいただいたことを記して御礼にかえさせていただきます。